

幕末・維新をどう語るか —志士、新選組、民衆、天皇…—

中央大学文学部
人文社会学科日本史学専攻
宮間純一
(日本近代史)

ー文学部の専門領域

文学部が扱う領域では、答えは必ず一つではなく、考える人・集団やその時々社会の在り方によって多様性を持つことが特徴です。

歴史学をとおして、そのことを紹介したいと思います。

ー「歴史」の主役はだれ？

私は子どものころから時代劇や、歴史ものの漫画や小説などが好きでよく読んでいましたが、いつも思っていたのは、「面白いんだけど、感情移入できる主人公が少ない」ということでした。どこか遠い世界の出来事を見ているようで、この感覚は教科書で勉強する日本史や世界史でも同じでした。

自分と同じような（と私が考える）存在が、そこにはほとんど登場しないことがその理由なのだと思います。つまり、源義経、織田信長、武田信玄といった「英雄」ではなく、社会を構成する小さな存在として一生を終えていくような人たちが、主役としては出てこないのです。しかしながら、社会の大部分はそのような“名も無き”人たちによって成り立っていますし、どの時代にも彼ら／彼女たちはたしかに存在したはずです。

ー過去と歴史

そもそも私たちが「歴史」として知っている（あるいは知ることができる）出来事や人物は、無数にある過去の内のほんの少しにすぎません。

歴史家たちは、先人たちが残した史料をもとに、過去にあった出来事を復元しようと試みますが、史料は人間生活のうちの一部しか伝えてくれません。みなさんが生活する日常のどのくらいの時間が、文字や映像で記録されているか、物として残されているか、考えてみてください。

「歴史」とは、限られた史料から明らかにされる事柄をつなぎ合わせて出来上がる物語なのです。史料が、人間生活のわずかな部分しか伝えてくれないのだから、完全な過去が再現できないのは当然です。

さらに、史料は考古・古代から今に至るまで膨大な数が残されており、すべての史料を歴史家たちが分析出来ているわけではありません。歴史家は、今の私たちにとって大切だ、

と考えるテーマを立てて、それを解決してくれそうな史料を選択し、研究に利用します。

たとえば、過去におきたパンデミックに対する関心の大きさが、つい数か月前までと今とでは段違いに変わっています。おそらく、これから感染症史の研究は、飛躍的に前進するはずです。これは、今の私たちが置かれている環境が、感染症の歴史に関心を向けさせているからに他なりません。同じように、東日本大震災の後には災害史の研究がさかんになりました。

つまり、現在「歴史」として明らかにされていることは、どこかで誰かがそれを重要だと考えて選ばれた過去になります。研究の世界だけではなく映画やドラマなども、多くの人の関心と呼び、人気のあるテーマから題材が選ばれています。

－評価もさまざま

さらに、やっかいなことに歴史上の人物や出来事への評価は人によって異なります。また、その人が生きている時代や社会の価値観によっても変化します。

あるクーデターの首謀者がいたとして、何年何月何日に何々という人物が反乱を起こしたということは、揺れ動かない事実だとします。結末は後世の私たちにはわかっている。その首謀者に対して、ある時代のとある研究者は、“彼は反逆者だ”と断罪しますが、別の時代のドラマでは“ヒーロー”として描かれることもあります。

今年の大河ドラマの主人公である明智光秀は、時の権力者である織田信長を殺した反逆者とも評価できますが、その政治手腕を高く評価する作品も増えてきているようです。

このような「歴史」に対する認識の変化は、自然に湧いて出るわけではなく、背景にある社会とつながって形作られています。

－歴史学の役割

歴史学は、研究対象として選ばれる出来事・人物は過去の一部だということ、「歴史」の理解の仕方には多様性があることを認識しつつ、その意義を現在との対話で考え、多様な角度から解釈しようとする学問なのです。

学校のテストや受験勉強では「史実」（〇〇年に…が起きた）を覚えることに重きが置かれていますので、高校生のみなさんの多くは、歴史学というのは「史実」を明らかにして確定させていく専門領域だ、という印象をもっているのではないかと思います。

よくテレビの歴史系番組で目にする、「新しく発見された史料によれば、…と考えられていたことは実はこうだったのだ」、「教科書に書かれていることは最新の研究だとこうなっている」といったイメージです。

もちろん、過去にあったことを、史料を分析することでできるだけ正確に見極め、「史実」として確定する、という作業は歴史学にとって大切な作業です。ただし、それは研究のプロセス、過程ではあってもゴールではありません。歴史学の仕事はその先にあります。

－歴史学は過去と現在の対話

私は、史料から明らかにできた（と思われる）過去を、今私たちが生きている社会との対話の中でどのように考え、評価し、それをどのような「歴史」として社会に発信してゆくのか、を検証するのが歴史学の使命だと考えています。

有名なイギリスの歴史家エドワード・ハレット・カーは、こう言っています。

「歴史とは現在と過去との対話である。現在に生きる私たちは、過去を主体的にとらえることなしに未来への展望をたてることはできない。複雑な諸要素がからみ合って動いていく現代では、過去を見る新しい目が切実に求められている。」

E. H. カー『歴史とは何か』（岩波新書、1962年）

－歴史学は解釈の学問

過去と対話する現在には常に変化しますから、「歴史」の解釈もそれにともなって移り変わります。つまり、「歴史」は決まったものが、永遠に同じ形であるわけではなく、生き物のように姿かたちを変えていくのだと私は考えています。

必然的に、過去を見つめようとする歴史家は、現在の社会のなかで常に「歴史」を見る目を自覚的に養い、刷新していかなければならないのです。それを主体的にできてはじめて、未来を見通すことができるのだ、とカーは言うわけです。

－明治維新とは？

もう少し具体的な話題にしましょう。私が担当している科目に明治維新史という講義がありますが、そこで今年の4月、約130名の学生に「明治維新と聞いて頭に浮かぶドラマや漫画などの作品、あるいは人物、キーワードはなんでしょう」というアンケートをしました。

第1位は、2018年にNHK大河ドラマで放送された『西郷どん』です。明治元年にあたる1868年から150年にあわせて放映されたドラマで、大久保利通、木戸孝允とならんで維新の三傑と呼ばれる西郷隆盛を主役にしたものです。記憶に新しい方もいると思いますが、明治維新史の定番の主人公西郷を中心に幕末・明治を近代の幕開けとして前向きに描いた作品だと思います。

第2位の『るろうに剣心』や第3位の『J I N』は少し毛色が違う内容ですが、マンガや映像メディアの影響力の強さを感じさせる結果となりました。『るろ剣』は、「偽官軍」として処刑された赤報隊の相楽総三（新政府に利用されて切り捨てられた存在として描かれます）など、明治維新の負の側面に光を当てている作品なのですが、『るろ剣』と応答える学生たちに、「明治維新の印象は？」とさらに聞くと、明治維新は近代社会を作り出した出発点で、志ある人たちによってなすとげられた、というポジティブな回答が返ってきました。みなさんが、明治維新と聞いて思い描くのはどんなことでしょうか。

－明治維新のいくつかの見方

明治維新を初めに「歴史」としてまとめようとしたのは、当事者である明治新政府でした。誕生したばかりの新政府は、天皇の名のもとに修史事業の開始を指示します。これは、古代に編纂された『日本書紀』をはじめとする六国史以来途絶えていた、勅撰の歴史書を作成するように命じるものでした。事業の目玉となるのが、「王政復古」の歴史です。天皇をいただく新政府は、徳川将軍から天皇への政権交代を正当な歴史と位置付けるために、同時代を「歴史」として叙述しようと着手したわけです。こうした新政府の立場から創

り出された歴史観のことを「王政復古史観」と呼んでいます。第二次大戦中には皇国史観を支える歴史認識になっていきます。

そのような歴史観、価値観は、1945年8月15日の敗戦をもって180度転換します。敗戦によって、王政復古史観・皇国史観は崩れ去り、歴史家たちは、市民のための新たな「歴史」の構築を模索し始めます。直近で戦争、敗戦という日本史上でも最も悲惨な出来事を経験した歴史家たちは、戦争に突き進んだ日本の近代を批判的に評価するようになります。どうして日本の近代は破滅の道を歩んでしまったのか、と。そこで、近代の出発点と認識されていた明治維新も批判的に検証されるようになります。

しかしながら、明治維新を社会全体でポジティブにとらえる時期がやってきます。1954年の年末ごろから日本は好景気を迎え、1973年ころまで飛躍的な経済成長を遂げます（いわゆる高度経済成長期）。国民の生活は戦後とくらべてはるかに豊かになり、国民の多くが好景気を実感できた時期でした。戦後復興を成し遂げ、世界的な経済大国となった日本では、1960年代頃に明治維新ブームがおきます。今の豊かな、世界でも有数の先進国となった日本の起源を、明治維新にもとめ、爽快な成功物語とみなす風潮が生まれたことにより生じたブームです。

この時期に流行った小説の代表が、司馬遼太郎の作品です。『燃えよ剣』は土方歳三を、『竜馬がゆく』は坂本竜馬を、全国でだれもが知っている人気ものにしました。1968年には『竜馬がゆく』は大河ドラマにもなっています。経済的に成功を収めた当時の日本の人びとにとって、低い身分の出身であった土方や坂本が、志をもって動乱の政治世界で活躍する痛快劇は、司馬遼太郎の筆力とあいまって広く受け入れられていきます。この1968年は、明治改元から100年を迎える年で、政府が反対を押し切って明治100年記念事業を推進した年でもありました。

ここで紹介したのはほんの数例ですが、明治維新の解釈が、時代やその時々々の社会のあり方によって大きく動いてきたことがわかんと思います。

この間に、少なくない数の史料が発見・公開され、新たな史料をもとに修正された事実も多いです。とはいえ、通史を根底からひっくり返すような発見はありません。ほとんど同じ「史実」の積み重ねの上に成り立つ「歴史」であっても、そのとらえ方は絶対的なものではないのです。

一新選組

さらに具体的な事例を新選組で確認していきます。新選組の発端は、14代将軍徳川家茂の警護をするために組織された浪士組にさかのぼります。浪士組は、文久3年（1863）年の将軍の上洛、京都の孝明天皇に将軍が会いに行く際、その身辺を守ることを名目に結成されます。当時は尊王攘夷運動がピークを迎えていたころで京都には、さまざまな政治的主張をもつ志士や浪人が集まっていました。

集まってきた浪士の中に、多摩地域の近藤勇や土方歳三といった青年たちのグループがあります。浪士組は、京都に上ったのちに江戸への帰還が命じられますが、近藤たちのグループは、江戸へもどることを拒み、京都に残ります。彼らが母体となつてのちに新選組が組織されます。新選組は、京都守護職のもと京都市中の治安維持活動に従事しながら、攘夷派の志士を一網打尽にした池田屋事件などを起こしたことで有名です。慶応4年（1868）

に起きた戊辰戦争では旧幕府側にたって抗戦し、局長の近藤勇はとらえられて処刑され、土方歳三は箱館五稜郭で戦死することになります。

ー私の新選組の見方

新選組の評価もさまざまですが、強烈な身分願望、侍になりたい、より上位の身分に上りたい、という欲求を抱えて誕生した組織だと私は考えています。新選組の主な参加者は、身分制によって支えられている近世社会においては、出自が拔群によい、あるいは社会的地位が高い、とは言えない人物ばかりです。

近藤勇は、調布の百姓の家に生まれ、のちに天然理心流の道場を経営していた近藤周助の養子となる百姓です。土方も百姓としては有力な家の出身ではありますが、とはいえ百姓です。近世には、身分間に流動性があつたことも明らかにされていますが、原則として家に身分は紐づけられているので、百姓の家に生まれた人間が侍になることは簡単ではありません。

しかし、幕末には身分制も動揺し、その中で近藤らも武士としての身分を獲得していきます。このような身分の変動は、この時期の社会全体に現れてくる現象です。新選組はそうした状況の中で表れた、幕末ならではの社会現象の一つだと私は考えています。

ー同時代の評価

同時代の人々が新選組をどう評価していたのか、というのも気になるところです。戊辰戦争の最中に新政府の立場から出された史料には、次のような記事がみられます。

「(近藤勇は一宮間註) 下総の国流山におゐて官軍に手向ひいたし、或ハ徳川の内命を受候などゝ偽りとなへ不容易企におよび候段、上ハ朝敵、下ハ徳川の命を偽わり候次第、其罪数ふるにいとまあらず、仍て死刑におこなひ梟首せしむる」(『大日本維新史料稿本』、東京大学史料編纂所蔵)

近藤勇は、下総国流山で新政府軍に捕縛されます。そのことに言及したのち、近藤は天皇に齒向かった賊なので処刑してさらし首にする、と書かれています。ここに出てくる近藤や新選組は「悪」以外のなにものでもないわけです。この史料は、新政府の立場から書かれたものだから当然の評価なのですが、戦争に勝利する新政府が建設した時代において、ここで貼られたレッテルは死後も彼らにこびりついて容易には離れません。

ー地域での復権運動

このような、戊辰戦争において天皇に弓引いたとされる人びとは「朝敵」と呼ばれ、生きづらい明治をスタートさせることになります。明治政府は、彼らをおおっぴらに供養したり、顕彰したりすることを認めませんでした。明治政府が「朝敵」となった戦死者の供養を公式に認めるのは明治7年(1874)を待たなければなりません。

近藤や土方を公的に供養することも可能となりますが、多摩地域の関係者はそこにとどまらず、近藤・土方をほめたたえるための記念碑を建設しようと計画します。新選組の支援者で土方歳三の義兄である佐藤彦五郎や、同じく新選組のパトロンであった小島鹿之助らは計画を主導し、近藤の旧門人や有志から募金を集めて具体化していきます。記念碑に彫られる碑文は、もちろん土方と近藤の功績を顕彰する内容です。

中央大学多摩キャンパスからモノレールで3駅ほどいったところにある高幡不動の境内

には、「殉節両雄之碑」が立てられています。この顕彰碑には、明治 9 年（1876）の銘が入っているものの、建てることを許可されたのは明治 21 年（1888）のことでした。ひとたび「朝敵」となった人物の評価を覆すのが簡単ではなかったことがうかがえます。それでもなお、運動は継続し、顕彰碑をたてることに成功しました。

この動機は何か。新選組を復権させることは新選組を支えたみずからの復権でもあり、佐藤家や小島家は地域社会の有力者でもあるので、「朝敵」を輩出したとされる地域の汚名返上も視野に入れてのことだと考えられます。

彼らなりの、どうしても乗り越えなければいけなかった明治維新の解釈がここにみられます。新選組は、のちに司馬遼太郎の作品によって全国区になったのはたしかですが、佐藤や小島ら地域の人びとの活動なくしては、「歴史」の中にうもれていた存在だったのかもしれない。

ーむすびにかえて

ここまで述べてきたように、歴史学あるいは「歴史」においてはいく通りもの解釈を現在との対話の中で作り出すことが可能です。

今日の話題から、「歴史」は絶対的なものではないと理解し、それならば、今私たちはどのような対象をいかなる形で描いたら良いのか、そんなことを考えるきっかけをもってもらえたならうれしいです。それは、過去をカガミとして<わたし>を形成することにつながるはずです。

歴史学を含む文学部の専門領域（特に文学や歴史学、哲学など）は、古いことにコツコツと取り組んでいるイメージが強いと思いますが、このように現在とのかかわりの中で進められてきた学問を扱っています。

ぜひ、そのような目で関心のある専攻の学びを見てみてください。